

# Eureka X

六年制通信 No.14 令和4年7月15日(金)号

## 個性と教養

裁判員制度ができてもう10年以上ですね。法曹界とは何の関係もない一般国民の意見を重大事件の裁判に反映する、でしたっけ、この制度の趣旨は、よく知りませんが、これ、裁判員は籤引きで選ばれるはずですが、一度私の知り合いが当たりまして、かなり狼狽していたのを覚えています。素人ですからね、そりゃ慌てますよね。

籤引きで仕事を割り当てるという発想は、実に二千五百年以上前、古代ギリシアにありました。ちなみに古代のギリシア人は裁判が大好きなようです。オリエントの世界には帝王がいました。国を動かしていたのは選り抜かれた少数の官僚です。それに対し古代ギリシアでは君たちも歴史の時間に習うと思いますが、ポリスがたくさんできて、そこには王様もなく官僚もいません。その代わり日々の政治活動、軍事その他全般、全て籤引きで選ばれた「市民」が担っていました。裁判官役や演劇のコンテストの審査員なども籤引きです。さらに市民は兵士としての訓練も必要でした。確かに平等な決め方かもしれませんが、こういうことが成り立つには教育が必要だったはずですよ。

これらの職務をどの市民も遂行できなくてはならないとなると、市民全体が立派な道徳観を持ち高い教育を受ける必要があるということです。当時のギリシアは奴隷制を持ってはいましたが、自由人(奴隷ではないという意味)は教育に熱心だったし教養も深く、個性的な哲学者も数多く生まれています。

個性の問題でいつも思い出すのは「枇杷の木刀」の話です。枇杷の木は軽くて粘り強いので、昔から木刀として愛用されてきました。しかし、これは人間の勝手に、枇杷がまさか俺は立派な木刀になろうなどと思って育っているわけではないですね。枇杷の自然に持っている力は、あの甘い実をつける能力です。その能力を伸ばしてやるのが枇杷を育むこと、すなわち栽培すること(英語でcultivate)です。このcultivateの名詞形がcultureで、これを「文化」と訳しています。そうすると、枇杷の木を木刀として用いた私たちの知恵を文化と呼ぶよりも、手間をかけて大きな甘い実をつけてやること、これが本来の文化ということになりませんか。そういえばcultureには「教養」の意味もあります。これは耕す相手が土から人になっただけですね。

では、人間が教養を持つとはどういうことか。cultureの語感をイメージするならば、枇杷の木のように、その人の持つ能力を育むことだと言えそうです。枇杷の種が枇杷の実をつける能力を持っているように、人はそれぞれの能力を持っている。気がつかないだけです。そして枇杷は枇杷の実をつけるのであって、他の果実をつけはしません。人も同じで、A君にはA君独自のポテンシャルがあり、他に代えられないものがあ

るのです。恐らくはそれが個性、つまりその人のオリジナリティの萌芽と呼ぶものです。枇杷の種子を見ているだけでは果実の色も形も味も何もわからないように、そして手をかけ育まれたのちによりやく枇杷ならではの実をつけるように、君たちの中に眠る本物の個性はこれから生まれていくのです。その本物のオリジナリティが生まれたときに、君は **culture** が身についたと言ってよいでしょう。

文化や教養というものを英語の本来の意味から考えてみると、それは栽培すること、育てていくことであって、植物であっても人間に対してであっても、育てて大きな個性的な果実をつけていくことだと思います。そうであれば、教育の場というものは極めて大切な文化の場だと言えるのではないのでしょうか。しかし、枇杷と君たちには大きな違いがあります。枇杷の実が多く種の宿しているように、君たちもまた多くの個性を持っているに違いないと私は思っています。自分にさえまだわからない個性をきっと持っています。植物の種子は人の手を借りて大きく育つこともできるし、枯れてしまうこともある。種子を手にしたとき、種子の運命はその人に握られているということです。では君たちはどうでしょう。人間は自分の力で自分を教育することができる、自分の力で土壌を整え、肥料を吟味し、水を与えることができる。ここが枇杷と君たちの違いです。君たちは自分自身のカルチャーの主体になれるわけです。植物は太陽に向かって葉を伸ばすけれど、君たちは自分の太陽を見つけることから始められます。自分で自分を教育することができる君は幸せですね。

#### 今週のおすすめ

・池川 明 『前世を記憶する日本の子どもたち』 (ソレイユ出版)

タイトルでは前世、本文では過去生となっています。子どもが「自分はAさんの生まれ変わりだ」と言う。そのAさんが過去に実在したことが確認され、なおかつそれが家族以外の他人だったケース（私はおじいちゃんの生まれ変わりだ、とかではないケース）はアジア圏に多く、アメリカに数例、そして日本では1例のみだそうです。江戸時代の勝五郎（明治2年没）という少年で、程久保村（ほどくぼむら）の藤蔵の生まれ変わりだと言い張るので、祖母が少年を村に連れていくと、初めて訪れる村の「過去生の家」をすぐに見つけ、「以前はあの屋根はなかった。あの木もなかった」と言ったのだそう。藤蔵の両親は五郎少年が藤蔵にそっくりなのに驚き両家は親戚の縁を結んだという。国学者の平田篤胤が勝五郎から詳しく話を聞き『勝五郎再生記聞』という本にまとめました。岩波文庫で、うちの図書館にありますよ。江戸の終わりの文章ですから、ま、何となく何が書いてあるのかわかりますよ。手に取ってごらん。

池川さんのこの本には前世の記憶を持つ人々が多数紹介されています。私は何でも科学で解明できるなんて思っていないので、こういう不思議には素直に驚きます。それに、いつも言いますが、マナーの悪い人間を見ると「ま、人間1回目なら仕方ないか」と考えるようにしています。すると腹が立たないので。私には前世や来世があると都合がいいのです。徳を積んで来世も人間に生まれ変わりたいものですね。

BGMは Billy Joel の *Uptown Girl* でした…。